

## 名古屋港ガーデンふ頭で観察された鳥類

榊原 正己 小串 輝 大島 由貴 春日井 隆

名古屋港水族館・公益財団法人名古屋みなと振興財団 〒455-0033 愛知県名古屋市港区港町1-3

### Birds observed at the Port of Nagoya Garden Pier in Japan.

Masaki SAKAKIBARA Akira OGUSHI Yuki OSHIMA Takashi KASUGAI

Port of Nagoya Public Aquarium, Nagoya Port Foundation 1-3 Minatomachi, Minato-ku, Nagoya, Aichi 455-0033, Japan

Correspondence:

Masaki SAKAKIBARA E-mail: m-sakakibara@nagoyaminato.or.jp

#### 要旨

伊勢湾最湾奥に位置する名古屋港ガーデンふ頭とその隣接水域において、2022年4月から2023年3月の間で計45回にわたって、ラインセンサス法を用いて鳥類相を調査したところ、10目25科45種の鳥類を確認した。このうち8種は全調査日で確認し、さらに4種においては調査中に繁殖行動もしくは子育ての様子を確認した。ガーデンふ頭は1980年代初頭に整備が始まり、約40年を経て植林された樹木が成長し、人工林を形成しているが、一部の鳥類にとって繁殖可能な環境であることが分かった。さらに、ガーデンふ頭は渡りを行う鳥類にとっては中継地としても機能していることが示唆された。

We conducted a survey of the avifauna using the line census method at Nagoya Port Garden Pier and its adjacent waters, located at the far end of Ise Bay in Japan, over 45 occasions from April 2022 to March 2023. We confirmed the presence of 45 avian species belonging to 25 families and 10 orders. Among these, 8 species were observed on every survey date, and breeding behaviors or parental cares were confirmed in 4 species during the survey period. Garden Pier, which began development in the early 1980s, has seen approximately 40 years of tree growth, resulting in the formation of artificial forests. The artificial forests were found to provide a suitable breeding environment for certain bird species. Additionally, it was suggested that Garden Pier functions as a stopover site for migratory birds.

#### 序論

名古屋港ガーデンふ頭（以降ガーデンふ頭）は伊勢湾最奥部の名古屋港内においても最も奥部に位置している（図1）。現在のガーデンふ頭の場所は昭和初期にふ頭が整備され、名古屋港の物流の拠点であったが、港が拡大し物流の拠点が南下する中、再開発が始まり、現在は緑園として緑化整備されたほか、名古屋海洋博物館、展望台を有する名古屋港ポートビル、南極観測船「ふじ」、名古屋港水族館の文化教育施設および商業施設である

JETTYが所在する（図2）。また、旅客船バースが備わり、内外のクルーズ船や帆船も接岸し、一年中訪れる人でにぎわう、名古屋圏の一大アミューズメントゾーンとなっている。

ガーデンふ頭の西側には中川運河、東側には堀川が名古屋港に流入し、水辺環境が整っておりカモ目、チドリ目などの水鳥が観察される。また最初の整備から約40年を経た緑園も植林された樹木が成長し、人工林を形成し、多くの野鳥が飛来する。そこで2022年4月から

2023年3月の1年間、隣接水域を含むガーデンふ頭に出現する鳥類の種数確認のため観察調査を実施したので、確認された種類と出現状況を報告する。

### 調査地概要

ガーデンふ頭は陸域面積が22.6万㎡で、2つのふ頭から成る。東側のふ頭はイベント広場などを有するガーデンふ頭臨港緑園が1983年に整備され、1984年に名古屋港ポートビル、1985年に南極観測船ふじがオープンした（図2）。ガーデンふ頭臨港緑園内（図3）は遊歩道が整備され、クロマツ *Pinus thunbergia* やクスノキ *Cinnamomum camphora* などの高木やネムノキ *Albizia julibrissin* やオオシマザクラ *Prunus speciosa* などの中木、ナンテン *Nandina domestica* やマサキ *Euonymus japonicus* などの低木など多様な植物が植樹されている。また、名古屋港と定期航路で結ばれている世界の港に生育している樹木が植えられている“展示林コーナー”も配置されている。船溜まりを挟んだ西側のふ頭は、1992年に南館、2001年に北館が開館した名古屋港水族館が所在する。ふ頭の南側は2001年から水族館南側緑地として芝生広場が中心の緑化がなされている（図4）。その他、南極

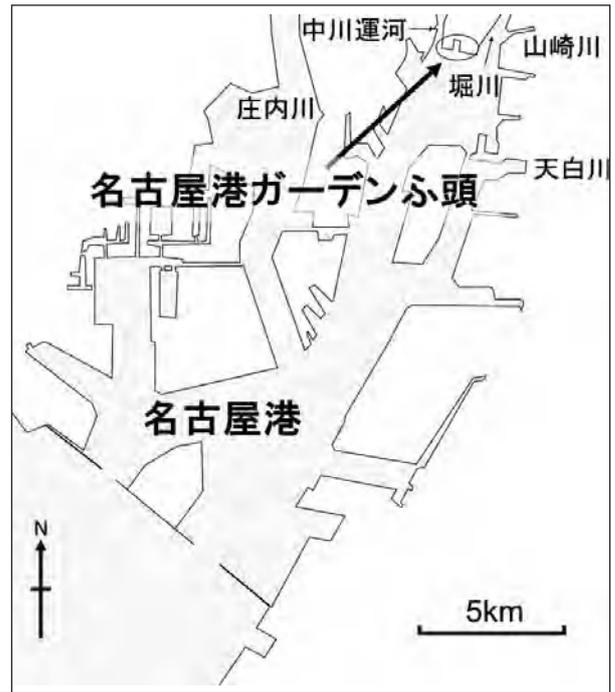


図1. 名古屋港ガーデンふ頭の位置  
本図は地理院地図（国土地理院）を加工して作成

観測船ふじの西側、名古屋港水族館の内外に芝生を中心とした緑化整備がなされている。

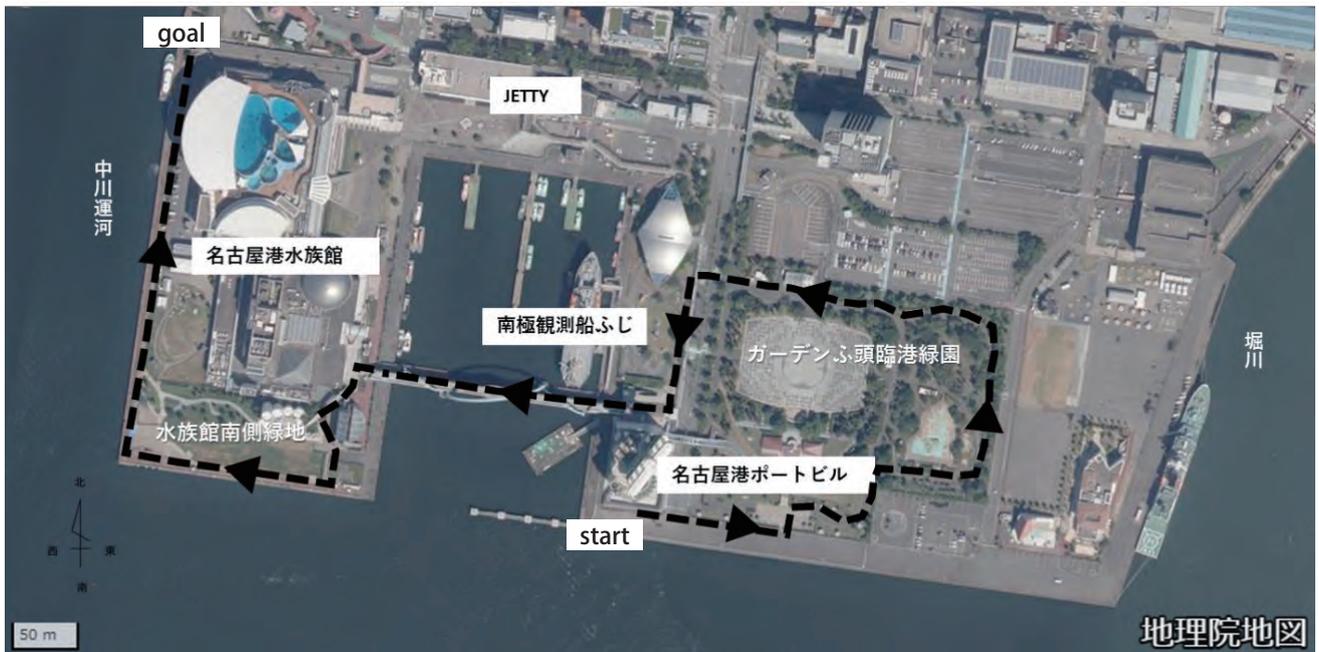


図2. ガーデンふ頭の航空写真  
破線は調査ルートを示す。  
本図は地理院地図（国土地理院）を加工して作成



図3. ガーデンふ頭臨港緑園



図4. 水族館南側緑地

## 材料および方法

調査は2022年4月から2023年の3月の1年間、各月約4回の頻度で計45回実施した。調査時間は午前7時から9時の間で行い、予め設定したルート（図2）をラインセンサス法により行った。2人から4人で歩行しながら、確認できる範囲の水域を含めて目視による鳥類の同定を行い、種類と個体数を記録した。調査には8倍の双眼鏡と20倍の望遠鏡を用い、可能な限り写真記録を残した。種名の表記は、日本鳥類目録改訂版第7版（日本鳥学会、2012）に従った。

## 結果

今回確認できた鳥類は、10目25科45種（1種は上種レベル）であった。なお、自然分布種だけでなく、外来種であるカワラバト（ドバト）*Columba livia* も含まれていた。

以下に各種の概要を報告するとともに、各月の出現状況を表1に示した。なお、調査時に種同定した際に写真記録できなかった種については、後日ガーデンふ頭で撮影した写真を用いた。

カモ目 Anseriformes

カモ科 Anatidae

### 1. ヒドリガモ

*Anas penelope* Linnaeus, 1758

図5-1（2023年3月7日撮影）

2023年1月、3月に中川運河河口で泳いでいるのを確認した。ヒドリガモを含む多数のカモ類が越冬地として愛知県を利用していることが報告されており（清水、

2015）、ガーデンふ頭付近の庄内川河口、新川河口、日光川河口、大江川河口、天白川河口においても冬季に報告がある（名古屋市緑政土木局都市農業課、2023）。

### 2. マガモ

*Anas platyrhynchos* Linnaeus, 1758

図5-2（2023年3月22日撮影）

2023年3月にガーデンふ頭中央に位置するポートブリッジの下で雄が単独で泳いでいた。庄内川河口では冬季だけでなく、夏を越して通年で確認できた個体もいたとしているが（清水、2015；名古屋市緑政土木局都市農業課、2023）、本調査では3月に一度のみの記録となった。また、ガーデンふ頭付近では庄内川だけでなく、新川河口、日光川河口、大江川河口、天白川河口においても冬季に報告がある（名古屋市緑政土木局都市農業課、2023）。

### 3. カルガモ

*Anas zonorhyncha* Swinhoe, 1866

図5-3（2022年7月22日撮影）

2022年4月から7月にかけて確認した。また7月18日には幼鳥を連れた個体を確認した。本種は通年で愛知県内に生息するとされ（清水、2015）、庄内川河口においても通年で観察されている（名古屋市緑政土木局都市農業課、2023）。本調査では、越冬期には一度も観察できなかったが、本種は個体数に著しい季節変動が見られるという特徴があるため（關、2009）、ガーデンふ頭で確認した個体が他の場所へ季節移動を行なっている可能性も考えられた。



カイツブリ目 Podicipediformes

カイツブリ科 Podicipedidae

7. カンムリカイツブリ

*Podiceps cristatus* (Linnaeus, 1758)

図5-7 (2023年3月17日撮影)

2022年4月に確認した後、次に確認できたのは11月であり、その後2023年3月まで引き続き確認した。また、3月7日に初めて夏羽に換羽した個体を確認した。

ハト目 Columbiformes

ハト科 Columbidae

8. カワラバト (ドバト)

*Columba livia* Gmelin, 1789

図5-8 (2022年9月26日撮影)

全調査日で確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査でも全ての調査地で報告されており(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023), 名古屋市では外来種として広く定着しているものと考えられる。

9. キジバト

*Streptopelia orientalis* (Latham, 1790)

図5-9 (2022年7月20日撮影)

全調査日で確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査でも全ての調査地で報告された(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。2022年5月14日にガーデンふ頭内のカシワ *Quercus dentata* の木で抱卵している個体を確認した。また、7月13日には雄が雌に対して求愛する様子も観察できた。愛知県において本種は一年中繁殖が見られるとする報告があるが(亀田, 2006), ガーデンふ頭においては冬季に繁殖や求愛行動は確認されなかった。

10. アオバト

*Treron sieboldii* (Temminck, 1835)

図5-10 (2022年10月29日撮影)

2022年10月に1個体のみを確認した。同じ名古屋港にある藤前干潟近辺の調査では2014年から2015年に庄内川河口および明德橋~庄内新川橋において確認されたが(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2016), それ以降

確認されておらず、本記録は稀な例といえる。本種は5月から10月には海岸で海水を飲むとされており(叶内, 2020), ガーデンふ頭を海水吸飲のために利用している可能性が考えられる。

カツオドリ目 Suliformes

カワウ科 Phalacrocoracidae

11. カワウ

*Phalacrocorax carbo* (Linnaeus, 1758)

図5-11 (2022年7月25日撮影)

全調査日で確認した。一年を通して今回記録した種の中で一番個体数が多く、一回の調査で1000個体を超える群れが上空を移動し、正確な個体数を把握できないこともあった。知多郡美浜町にある鵜の山における雛の吐き戻しによる研究(佐藤ら, 2009)では、ボラ *Mugil cephalus cephalus* の摂餌が最も多かったとされているが、本調査でもボラと思われる魚類を摂餌する様子を観察した。また、3月28日には頭部に婚姻色を呈した個体を確認した。

ペリカン目 Pelecaniformes

サギ科 Ardeidae

12. ササゴイ

*Butorides striata* (Linnaeus, 1758)

図5-12 (2022年7月20日撮影)

2022年5月から8月にかけて確認した。本種は春になると本州から九州にかけて各地にやってきて河川や湖沼などの水辺で生活し、繁殖することが知られており(樋口, 1996), 名古屋港に流入する大江川上流の上流に位置する大江川緑地では、2020年に本種がコロニーを形成した報告がある(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

13. アオサギ

*Ardea cinerea* Linnaeus, 1758

図5-13 (2022年11月2日撮影)

2022年4月と2023年1月を除き、ほぼ通年で確認した。また7月20日には幼鳥も確認した。本種は静止して獲物の接近を待つ待ち伏せ法の採餌を行うことが知られているが(中村・中村, 1995), 本調査では、水面近くを飛

翔しながら頭部のみを海面につけ、積極的に採餌を行う様子を観察した。

#### 14. ダイサギ

*Ardea alba* Linnaeus, 1758

図5-14 (2022年8月2日撮影)

2022年4月から2023年3月まで、1月および2月を除き確認した。本種は水面の魚を飛びながら一瞬のうちにくわえとる報告(成末, 1996)があるが、本調査でも、水面近くを飛翔しながら頭部のみを海面につけ、採餌を行う様子を観察した。

#### 15. コサギ

*Egretta garzetta* (Linnaeus, 1758)

2022年9月にガーデンふ頭上空を飛翔する姿を確認した。写真記録は残っていないが、脚全体が黒色で、足指のみが黄色であったことから本種であると同定した。本調査では本種と明確に同定できたものは9月以外になかったが、8月から10月にかけて、ガーデンふ頭の東に位置する大江川河口から山崎川河口付近において、多い時には100個体を超えるサギ科の鳥類を確認した。大江川河口では、2019年11月から2020年10月にかけて、1月と2月を除きほぼ通年にわたり本種が確認されていることから(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)、当該サギ科の鳥類の中に本種が含まれている可能性は十分に考えられる。

ツル目 Gruiformes

クイナ科 Rallidae

#### 16. オオバン

*Fulica atra* Linnaeus, 1758

図5-15 (2023年1月11日撮影)

2022年4月および、11月から2023年3月にかけて確認した。ガーデンふ頭付近の庄内川河口、新川河口、日光川河口、大江川河口、天白川河口においても報告がある(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。本種は積雪の多いところでは夏鳥で、それ以外では留鳥、または漂鳥とされている(叶内, 2020)。名古屋港とほぼ同緯度に位置する横浜市において本種は冬鳥であり(奥津, 2017)、本調査でも夏季に確認できなかったことから、

ガーデンふ頭においても本種は冬鳥である可能性が示唆された。

チドリ目 Charadriiformes

シギ科 Scolopacidae

#### 17. キアシシギ

*Heteroscelus brevipes* (Vieillot, 1816)

図5-16 (2022年5月14日撮影)

2022年5月にガーデンふ頭西側の岸壁に1個体のみを確認した。ガーデンふ頭付近では、庄内川河口、新川河口、日光川河口、大江川河口、天白川河口においても4月、5月、7月、8月、9月に報告がある(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

#### 18. イソシギ

*Actitis hypoleucos* (Linnaeus, 1758)

図5-17 (2022年12月5日撮影)

2022年7月と8月、12月から2023年の3月まで確認した。本種は冬季になると南下し、冬季に見られる個体はより北方から南下してきた個体であるとされる(中村, 1996)。本調査でも夏季に確認したが、9月から3ヶ月間は出現せず、冬季に再び確認した。この結果から、夏季と冬季で異なる個体がガーデンふ頭を利用していただ可能性が考えられる。本調査では船舶やボートを運河に出し入れするためのスロープの水際や干潮時に現れる陸場で、いずれも1個体で索餌している様子を観察した。

カモメ科 Laridae

#### 19. ユリカモメ

*Larus ridibundus* Linnaeus, 1766

図5-18 (2022年11月25日撮影)

2022年4月に確認した後、次に確認できたのは10月であり、その後2023年3月まで継続して確認された。本種は雑食性であり、水生昆虫や小魚類などの動物質を主な食物にするほか、パンやポップコーンなどで人に餌付けされていることもある(須川, 1996)。本調査でも人から給餌を受けている様子を確認した。また、11月にはガーデンふ頭臨港緑園内に植樹してあるクスノキに群れ、その実を摂餌する様子を確認した。本種が樹木の実を摂餌している報告は少なく、本事例は非常に希少であ

ると言える。

## 20. ウミネコ

*Larus crassirostris* Vieillot, 1818

図5-19 (2022年7月20日撮影)

2022年6月から12月, 2023年の3月に確認した。7月20日には本種の幼鳥と思われる個体が3個体で北に向かって飛翔していく様子を確認した。冬季にはガーデンふ頭の南側でカモメ属の群れが確認されることが多かったが、距離が遠いことが多かったため同定には至らなかった。本種は日本では1年中見ることができカモメであり(綿貫, 1996), 庄内川河口においても, 2019年11月から2020年10月にかけて, 通年にわたり本種が確認されていることから(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023), 当該カモメ属の鳥類の中に本種が含まれていた可能性がある。

## 21. セグロカモメ

*Larus argentatus* Pontoppidan, 1763

図5-20 (2022年7月20日撮影)

2022年4月に確認し, 次に確認できたのは11月であり, その際に第二回冬羽と思われる個体を確認した。その後2023年3月まで確認することができた。1月11日にはセグロカモメもしくはオオセグロカモメ *Larus schistisagus* の幼鳥(図5-45)と思われる個体が飛翔している姿を確認した。本属の幼鳥の識別は非常に困難で, 本報告以外に潜在的に他の種がいた可能性は否定できない。

## 22. コアジサシ

*Sterna albifrons sinensis* Pallas, 1764

図5-21 (2022年6月30日撮影)

2022年5月から7月までの間確認した。愛知県においては絶滅危惧ⅠB類(繁殖)・絶滅危惧Ⅱ類(通過), 名古屋市においては絶滅危惧Ⅱ類に評価されており(名古屋市環境局企画部環境活動推進課, 2015; 愛知県環境調査センター, 2020), 国内の本種の個体群は危機的状況にある。2019年にはガーデンふ頭から直線距離で約1.5km北に位置する裸地に40個体程の営巣が行われていたが(日本野鳥の会愛知県支部, 2023), 本調査を行った2022年の営巣場所の報告はされていない。しかし,

本調査では5月14日と6月22日に水中へ繰り返し飛び込み, 採餌する様子が確認できた。本種は繁殖期には巣からあまり移動せず, 周辺の水域で採餌する傾向があるため(Eglinton and Perrow, 2014), ガーデンふ頭近辺で繁殖・育雛を行っていた可能性が示唆された。

タカ目 Accipitriformes

ミサゴ科 Pandionidae

## 23. ミサゴ

*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)

図5-22 (2022年11月15日撮影)

2022年9月から11月にかけてと, 2023年の1月から3月にかけて確認した。愛知県では繁殖個体群は準絶滅危惧, 越冬個体群はリスト外として評価されている(愛知県環境調査センター, 2020)。名古屋市においては準絶滅危惧に評価されており, 庄内川, 新川, 日光川河口付近において通年にわたり本種が確認されている(名古屋市環境局企画部環境活動推進課, 2015)。ガーデンふ頭では9月4日, 11月2日に水中へ飛び込み, ボラと思われる魚類を捕獲し, そのまま飛翔していく様子を確認した。

タカ科 Accipitridae

## 24. トビ

*Milvus migrans* (Boddaert, 1783)

図5-23 (2022年8月20日撮影)

2022年6月と, 8月から2023年1月まで確認した。ガーデンふ頭付近では, 庄内川河口, 新川河口, 日光川河口, 天白川河口においても冬季に報告がある(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

ハヤブサ目 Falconiformes

ハヤブサ科 Falconidae

## 25. チョウゲンボウ

*Falco tinnunculus* Linnaeus, 1758

図5-24 (2022年10月5日撮影)

2022年10月に一度のみ確認した。名古屋港ポートビル展望室の下部に設けられた, 清掃用ロープを垂らすための穴に向かって, 1個体がホバリングし, もう1個体が近くを飛翔していた。この穴はビルの外壁に存在し,

本種はこれを巣作りや休息のための場所として利用している可能性が示唆されたが、この日以外に本種が観察されなかったため、不明である。

スズメ目 Passeriformes

モズ科 Laniidae

26. モズ

*Lanius bucephalus* Temminck & Schlegel, 1845

図5-25 (2023年2月9日撮影)

2022年9月, 11月, 2023年1月, 2月に確認した。本種は秋から冬にかけて1haほどのなわばりを持つことが知られており(山岸, 1997), 本調査での発見個体数は9月26日の雄1個体, 雌1個体の合計2個体が最大で, それもガーデンふ頭の西側と東側に分かれており, 直線距離にして約500m離れていた。それ以外の調査日には全て1個体ずつしか確認できなかった。

なお, 名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 45箇所の調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

カラス科 Corvidae

27. ハシボソガラス

*Corvus corone* Linnaeus, 1758

図5-26 (2023年3月22日撮影)

全調査日で確認した。2022年5月14日にはガーデンふ頭東側にある緑地内の街頭上に巣を確認し, その中に2個体が滞在しているのを観察した。また, 6月6日にはムクドリ様の鳥類の死骸を啜っている様子を観察した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

28. ハシブトガラス

*Corvus macrorhynchos* Wagler, 1827

図5-27 (2024年7月30日撮影)

2022年10月, 12月, 2023年1月に確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では50箇所の調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

シジュウカラ科 Paridae

29. シジュウカラ

*Parus minor* Temminck & Schlegel, 1848

図5-28 (2022年9月4日撮影)

2022年6月, 8月から11月, 2023年3月に確認した。9月には昆虫類を摂餌している様子を確認した。

ツバメ科 Hirundinidae

30. ツバメ

*Hirundo rustica* Linnaeus, 1758

図5-29 (2022年6月30日撮影)

2022年4月から7月と, 2023年3月に確認した。6月30日にはガーデンふ頭内のつどいの広場に設置された手すりに留まり, 休息している様子を確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

ヒヨドリ科 Pycnonotidae

31. ヒヨドリ

*Hypsipetes amaurotis* (Temminck, 1830)

図5-30 (2022年4月24日撮影)

全調査日で観察した。本種の繁殖期は5月から9月であり, 一夫一妻で繁殖することが知られるが(羽田・小林, 1967), 本調査でも2022年8月20日に幼鳥3個体とその近くに親鳥と思われる2個体を観察した。また, 本種は秋に北から南へ渡りを行い, 年によっては冬期に奄美大島や沖縄本島まで移動する(山口, 2005)。本調査でも2022年9月30日, 10月12日には100個体を越す群れが同じ方角へ飛ぶ様子が観察された。本調査中にはグミ属 *Elaeagnus* の一種の実やサクラ属 *Cerasus* の一種の芽を採食している様子や, アキニレ *Ulmus parvifolia* の葉を啄む様子, ガーデンふ頭臨港緑園内の噴水広場にて水を飲む様子を確認した。春から夏にかけては動物食を摂餌する割合が増えることが知られており(唐沢, 1997; 山口, 2005), 2023年3月8日には樹上に群れを作っている昆虫の一種を飛翔しながら採餌する様子も観察した。

ウグイス科 Cettiidae

32. ウグイス

*Cettia diphone* (Kittlitz, 1830)

図5-31 (2024年7月31日撮影)

2022年11月, 12月と2023年2月, 3月に計5回確認した。調査期間中にはさえずりはせず, 地鳴きのみ確認した。いずれも低木の茂みの中を移動する様子を確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 45箇所の調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

ムシクイ科 Phylloscopidae

33. メボソムシクイ上種

*Phylloscopus borealis* s.l.

図5-32 (2022年8月2日撮影)

2022年8月にのみ確認した。観察個体は, 頭中央線がなかったこと, 腹面は淡い黄色味を帯びていること, 淡い黄色味を帯びた眉斑があること, 地理的な理由からメボソムシクイもしくはオオムシクイと考えられたが, 同定には至らなかった。この2種は外部形質の各部位の計測や音声により識別が可能であるが(齋藤ほか, 2012), 囀りを聴くことができなかつたため, 今回は齋藤ほか(2012)が提唱しているメボソムシクイ上種とした。

メジロ科 Zosteropidae

34. メジロ

*Zosterops japonicus* Temminck & Schlegel, 1845

図5-33 (2023年1月11日撮影)

2022年9月から2023年3月まで確認した。1月11日には近隣住民が野良ネコが飲水するために設置したプラスチック容器で水浴びをしている様子を確認した。また, 2月22日には梅の花の蜜を採餌する様子を確認した。

ムクドリ科 Sturnidae

35. ムクドリ

*Spodiopsar cineraceus* (Temminck, 1835)

図5-34 (2022年8月27日撮影)

全調査日で観察した。2022年5月に巣材のための枝を啜えて運ぶ様子が観察され, 6月5日, 22日, 30日には幼鳥を確認した。また, 親と思われる個体が幼鳥へ直

接給餌する様子も観察した。本種がヤマモモ *Morella rubra* の実やクマゼミ *Cryptotympana facialis* を摂餌する様子も観察された。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

ヒタキ科 Muscicapidae

36. シロハラ

*Turdus pallidus* Gmelin, 1789

図5-35 (2023年3月22日撮影)

2022年12月に初確認し, 2023年3月まで確認した。渡来を確認した日からは全ての調査で観察できた。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 44箇所の調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

37. ツグミ

*Turdus naumanni* Temminck, 1820

図5-36 (2023年3月28日撮影)

2022年4月に確認した後, 次に確認できたのは12月であり, その後2023年3月まで引き続き確認した。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

38. ジョウビタキ

*Phoenicurus aureus* (Pallas, 1776)

図5-37 (2022年11月2日撮影)

2022年10月, 11月と2023年2月, 3月に確認した。本種は親鳥から雛への給餌観察から, アリ科 Formicidae, ゲジ科 Scutigerae, シャクガ科 Geometridae の成虫および幼虫, クモ目 Araneae などの動物質の食物を利用していることが報告されており(林・山路, 2014), 本調査では3月8日にクロゴキブリ *Periplaneta fuliginosa* を摂餌している様子を確認した。

39. イソヒヨドリ

*Monticola solitarius* (Linnaeus, 1758)

図5-38 (2022年11月2日撮影)

2022年8月から2023年3月まで継続して確認した。本種は繁殖期に一夫一妻のつがいで生活し(林, 1997), 新潟県では3月中旬ごろから8月下旬ごろまで雌雄のペアで行動している様子が観察されている(鳥居, 2019)。本調査では, 主に夏から冬にかけて本種が確認され, 雄の囀りは確認したものの, 雄雌がペアで行動する様子は確認できなかった。

#### 40. コサメビタキ

*Muscicapa dauurica* Pallas, 1811

図5-39 (2022年9月26日撮影)

2022年9月, 10月に計3回, ガーデンふ頭つどいの広場でそれぞれ1個体確認した。本種は愛知県では夏鳥であり, 繁殖個体群は準絶滅危惧として評価されており, 県内では段戸裏谷から瀬戸市や岡崎市の山麓まで繁殖の記録がある(愛知県環境調査センター, 2020)。秋の渡りの休憩地として, ガーデンふ頭を利用していった可能性が考えられる。

#### 41. キビタキ

*Ficedula narcissina* (Temminck, 1836)

図5-40 (2022年10月12日撮影)

2022年10月に雌を1個体のみ確認した。後述の1個体含め, 計2個体の発見記録から, 本種は秋の渡りの休憩地としてガーデンふ頭を利用している可能性が考えられる。

#### スズメ科 Passeridae

#### 42. スズメ

*Passer montanus* (Linnaeus, 1758)

図5-41 (2023年2月22日撮影)

全調査日で観察した。庄内川河口では11月から2月の平均確認数が4月から7月よりも有意に大きいことが報告されているが(清水, 2017), 本調査では時期による本種の個体数に大きな差は見られなかった。また, 名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023),

#### セキレイ科 Motacillidae

#### 43. ハクセキレイ

*Motacilla alba* Linnaeus, 1758

図5-42 (2022年11月30日撮影)

全調査日で観察した。本種は他種への攻撃行動として同じセキレイ科の4種に加え, ホオジロ *Emberiza cioides*, ヒバリ *Alauda arvensis*, チョウゲンボウ, モズに対して追跡行動を行ったことが報告されているが(Watanabe and Maruyama, 1977), 本調査では2022年9月14日に近接したカワラバトをしつこく追跡する行動を確認した。また, 名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023),

#### アトリ科 Fringillidae

#### 44. カワラヒワ

*Chloris sinica* (Linnaeus, 1766)

図5-43 (2022年6月5日撮影)

全調査日で観察した。2022年4月1日には交尾をする様子を, 2023年3月22日には地表に露出した樹木の根を引っ張り持ち去ろうとする行動が観察されたことから, ガーデンふ頭では繁殖をしていると考えられる。名古屋市で2019年から2020年にかけて実施された51箇所の鳥類調査では, 全ての調査地で報告されている(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)。

#### ホオジロ科 Emberizidae

#### 45. アオジ

*Emberiza spodocephala* Pallas, 1776

図5-44 (2022年10月29日撮影)

2022年10月に雌を2個体確認した。この日以外は確認できなかったことから, 本種にとってガーデンふ頭は渡りの中継地として利用されている可能性が考えられる。ガーデンふ頭付近では, 2019年11月から2020年5月に庄内川河口, 2020年3月に日光川河口, 2020年1月に大江川河口で報告があるが(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023), その発見個体数は最大で3個体と決して多くない。

### ラインセンサス調査外にガーデンふ頭で確認した種

2022年8月にはガーデンふ頭北側に位置する地下鉄名古屋港駅南口付近で、夜間において街路樹にササゴイ様のサギ科鳥類が留まっているのを確認した。10月14日には水族館敷地内のしおかぜ広場にて、ノビタキ *Saxicola torquatus* を2個体確認した。また、10月29日にはガーデンふ頭の北側に位置する商業施設 JETTY の出入り口前の地面に不動のキビタキの雄個体が観察されたが、人が近づいても全く動かなかったことから、渡りの途中でガラスに衝突し、動けなくなっていた可能性が示唆された。

### 考察

本調査において、全調査日で確認した種は、キジバト、カワラバト、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワの8種であり、その中でもキジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワに関しては繁殖行動もしくは子育ての様子が確認できた。ガーデンふ頭は1980年代初頭に整備が始まり、植林された樹木が成長し、約40年を経て人工林が形成されている。一部の鳥類がこの人工林を繁殖場所として利用しており、季節を問わず生息できる環境が整っていることが分かった。一方、一時的にガーデンふ頭を利用していると考えられた種としては、アオバト、キアシシギ、メボソムシクイ上種、コサメビタキ、キビタキ、アオジ、ノビタキが挙げられる。ガーデンふ頭が多くの野鳥にとっての渡りの休憩地として、もしくは海水の吸飲のために機能している可能性が示唆された。

本調査中に、スズメ、ユリカモメ、ムクドリ、カワラバトについて、人からの餌づけをされている場面を幾度となく確認した。野生生物への餌やりによって特定の種が局地的に集合して行動生態の改変や生物多様性の低下が起こったり、感染症の発生リスクが高まったり、生物学的健康を人為的に損なうおそれがあることが報告されており(福井, 2013)、通年人が集まりやすいガーデンふ頭ではこれらのリスクが特に顕著になると考えられる。

また、ガーデン埠頭から直線距離にして3~4 kmほどにある藤前干潟では、2019年から2020年にかけてカモ目18種、およびチドリ目45種が観察されたことが報告されているが(名古屋市緑政土木局都市農業課, 2023)、

これに比べてガーデンふ頭では種数が少なく(カモ目6種、チドリ目6種)、多様性が低いことが明らかとなった。藤前干潟では潮の満ち引きによって干潟が出現し、そこに鳥類のエサ資源となる豊富な底生生物が存在しているのに対し(川瀬, 2007)、ガーデンふ頭ではそのような干潟は存在しないことが両者の種数の違いを引き起こしているものと考えられる。今後は、名古屋市内の他地域との比較を行いながら、出現する鳥類の動向を継続的にモニタリングすることが重要であると考えられる。

### 謝辞

日本野鳥の会の星野綾子様と名古屋市野鳥観察館の近藤孝様には、種の同定において多大なご助言をいただいた。これらの方々に対し心から深く謝意を表する。

### 引用文献

- 愛知県環境調査センター. 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2020-動物編-. 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 愛知. 769pp.
- 姉崎 悟. 2016. 愛知県篠島の鳥類. *Bird Research*, 12: A55-A64.
- Eglington, S. and M. R Perrow. 2014. Literature review of tern (*Sterna & Sternula* spp.) foraging ecology., Final Report 2014. ECON Ecological Consultancy Limited, Norwich, 49pp.
- 福井大祐. 2013. 人と野生動物の関わりと感染症—野鳥大量死と餌付けを例に—. *日本野生動物医学雑誌*, 18 (2): 41-49.
- 林 正敏・山路公紀. 2014. 八ヶ岳周辺におけるジョウビタキの繁殖と定着化, *日本鳥学会誌*, 63: 311-316.
- 林 哲. 1997. イソヒヨドリ. *日本動物大百科第4巻 鳥類 II* (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). pp.99-100. 平凡社, 東京.
- 羽田健三・小林建夫. 1967. ヒヨドリの生活史に関する研究. *山階鳥研報*, 27: 61-71.
- 樋口広芳. 1996. ササゴイ. *日本動物大百科第3巻 鳥類 I* (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). pp.40-42. 平凡社, 東京.
- 唐沢孝一. 1997. ヒヨドリ. *日本動物大百科第4巻 鳥類*

- II (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). p.83. 平凡社, 東京.
- 叶内拓哉(編). 2020. フィールド図鑑日本の野鳥第2版. 文一総合出版, 東京. 68pp.
- 亀田佳代子. 2006. キジバト. バードリサーチニュース, 3 (8) : 2-3.
- 川瀬基弘. 2007. 藤前干潟の軟体動物. 瀬木学園紀要, 1: 141-148.
- 中村登流. 1996. イソシギ. 日本動物大百科第3巻 鳥類 I (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). p.90. 平凡社, 東京.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 水鳥編. 保育社, 大阪. 304 pp.
- 名古屋市環境局企画部環境活動推進課. 2015. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2015 - 動物編 -. 名古屋市環境局企画部環境活動推進課, 名古屋. 504pp.
- 名古屋市緑政土木局都市農業課. 2016. 名古屋の野鳥2014. 名古屋市野鳥生息状況調査報告 平成26年4月 - 平成27年3月調査. 名古屋市緑政土木局都市農業課, 名古屋. 177pp.
- 名古屋市緑政土木局都市農業課. 2023. 名古屋の野鳥2020 2019-2020年度第10次名古屋市野鳥生息状況調査報告. 名古屋市環境局なごや生物多様性センター, 名古屋. 191pp.
- 成末雅恵. 1996. ダイサギ. 日本動物大百科第3巻 鳥類 I (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). pp.44-45. 平凡社, 東京.
- 日本鳥類学会目録編集委員会. 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥類学会, 三田. 438pp.
- 日本野鳥の会愛知県支部. 2023. コアジサシ調査. <https://www.wbsj-aichi.org/cyousa/koajisasi.html>. 2024年8月24日確認
- 奥津敏郎. 2017. 横浜市野鳥のオオバンの増加記録. BINOS, 24: 63-70.
- 齋藤武馬・西海 功・茂田良光・上田恵介. 2012. メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius) の分類の再検討 - 3つの独立種を含むメボソムシクイ上種について -. 日本鳥学会誌, 61: 46-59.
- 佐藤真衣・井上祐紀子・石垣亜美子・山脇諒子・中川靖大・新妻靖章. 2009. 愛知県二地域におけるカワウの食性. 日本鳥学会誌, 58 (2) : 196-200.
- 關 義和. 2009. カルガモの季節移動について. Bird Research, 5: S1-S35.
- 清水美登里. 2015. 愛知県における鳥類の経年変化 (3). 愛知県環境調査センター所報, 42: 41-51.
- 清水美登里. 2017. 愛知県内におけるスズメ (*passer montanus*) の生息状況の変化. 愛知県環境調査センター所報, 44: 27-34.
- 鳥居憲親. 2019. 岩礁海岸におけるイソヒヨドリの採食生態. 日本鳥学会誌, 68: 367-373.
- 須川 恒. 1996. ユリカモメ. 日本動物大百科第3巻 鳥類 I (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). p.112. 平凡社, 東京.
- Watanabe, M. and N. Maruyama. 1977. . Wintering ecology of White Wagtail *Motacilla alba lugens* in the middle stream of Tama River. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology, 9(1): 20-43.
- 綿貫 豊. 1996. ウミネコ. 日本動物大百科第3巻 鳥類 I (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). p.114. 平凡社, 東京.
- 山岸 哲. 1997. モズ. 日本動物大百科第4巻 鳥類 II (日高敏隆, 監; 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲, 編). pp.85-87. 平凡社, 東京.
- 山口恭弘. 2005. ヒヨドリ. バードリサーチニュース, 2 (11) : 4-5.



図5. 名古屋港ガーデンふ頭で撮影した鳥類

1. ヒドリガモ *Anas Penelope* : 2023年3月7日撮影
2. マガモ *Anas platyrhynchos* : 2023年3月22日撮影
3. カルガモ *Anas zonorhyncha* : 2022年7月22日撮影
4. ホシハジロ *Aythya ferina* : 2023年2月16日撮影
5. スズガモ *Aythya marila* : 2023年3月28日撮影
6. ウミアイサ *Mergus serrator* : 2023年3月17日撮影
7. カンムリカイツブリ *Podiceps cristatus* : 2023年3月17日撮影
8. カワラバト (ドバト) *Columba livia* : 2022年9月26日撮影



図5.（続き）

9. キジバト *Streptopelia orientalis* : 2022年7月20日撮影

11. カワウ *Phalacrocorax carbo* : 2022年7月25日撮影

13. アオサギ *Ardea cinerea* : 2022年11月2日撮影

15. オオバン *Fulica atra* : 2023年1月11日撮影

10. アオバト *Treron sieboldii* : 2022年10月29日撮影

12. ササゴイ *Butorides striata* : 2022年7月20日撮影

14. ダイサギ *Ardea alba* : 2022年8月2日撮影

16. キアシシギ *Tringa totanus* : 2022年5月14日撮影



図5.（続き）

- 17. イソシギ *Actitis hypoleucos* : 2022年12月5日撮影
- 19. ウミネコ *Larus crassirostris* : 2022年7月20日撮影
- 21. コアジサシ *Sterna albifrons* : 2022年6月30日撮影
- 23. トビ *Milvus migrans* : 2022年8月20日撮影

- 18. ユリカモメ *Larus ridibundus* : 2022年11月25日撮影
- 20. セグロカモメ *Larus argentatus* : 2022年7月20日撮影
- 22. ミサゴ *Pandion haliaetus* : 2022年11月15日撮影
- 24. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* : 2022年10月5日撮影

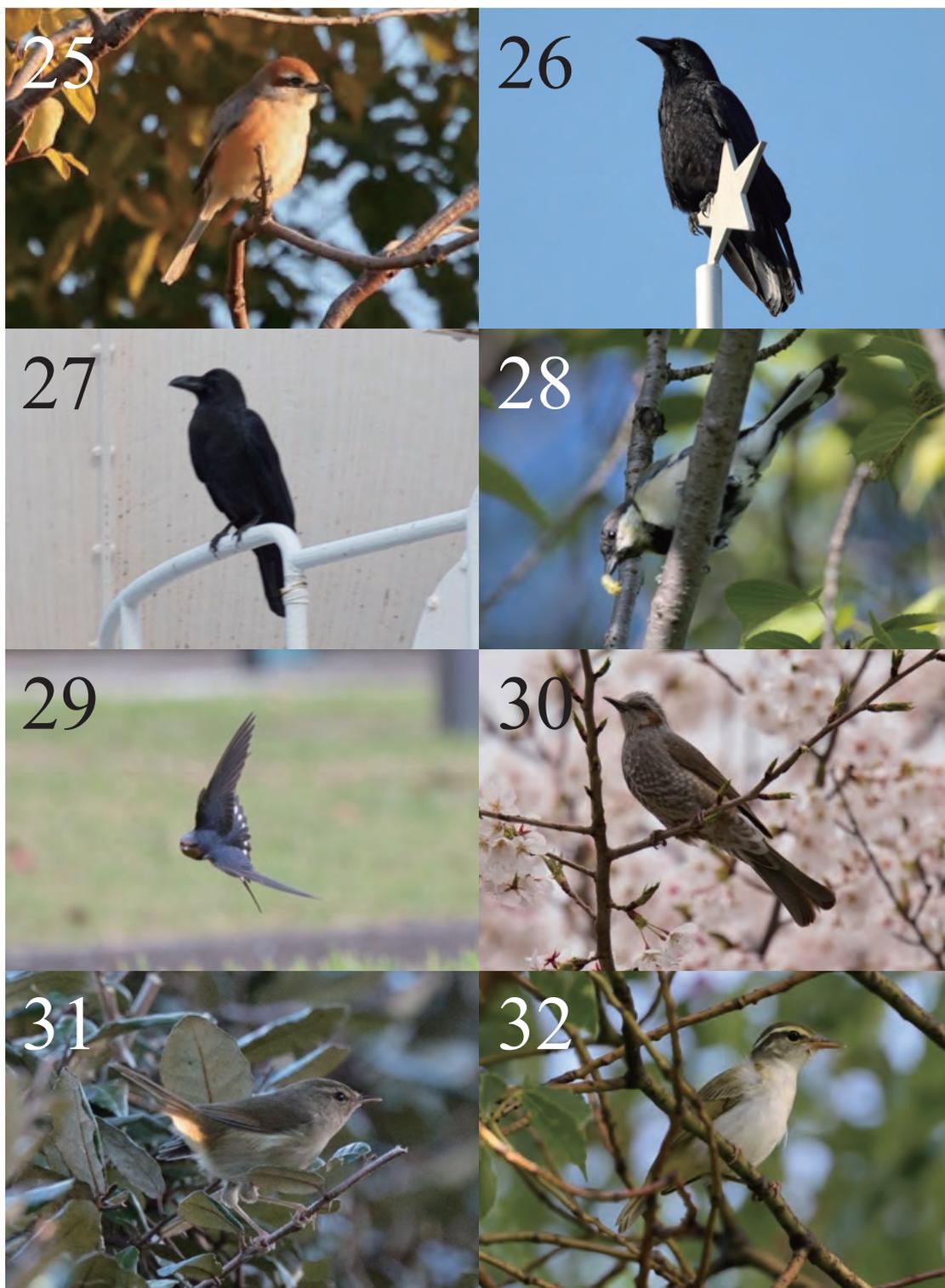


図5.（続き）

25. モズ *Lanius bucephalus* : 2023年2月9日撮影

27. ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* : 2024年7月30日撮影

29. ツバメ *Hirundo rustica* : 2022年6月30日撮影

31. ウグイス *Cettia diphone* : 2024年7月31日撮影

26. ハシボソガラス *Corvus corone* : 2023年3月22日撮影

28. シジュウカラ *Parus minor* : 2022年9月4日撮影

30. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* : 2022年4月24日撮影

32. メボソムシクイ上種 *Phylloscopus borealis* s.l. : 2022年8月2日撮影



図5.（続き）

33. メジロ *Zosterops japonicus* : 2023年1月11日撮影

35. シロハラ *Turdus pallidus* : 2023年3月22日撮影

37. ジョウビタキ *Phoenicurus aureus* : 2022年11月2日撮影

39. コサメビタキ *Muscicapa dauurica* : 2022年9月26日撮影

34. ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* : 2022年8月27日撮影

36. ツグミ *Turdus naumanni* : 2023年3月28日撮影

38. イソビヨドリ *Monticola solitarius* : 2022年11月2日撮影

40. キビタキ *Ficedula narcissina* : 2022年10月12日撮影

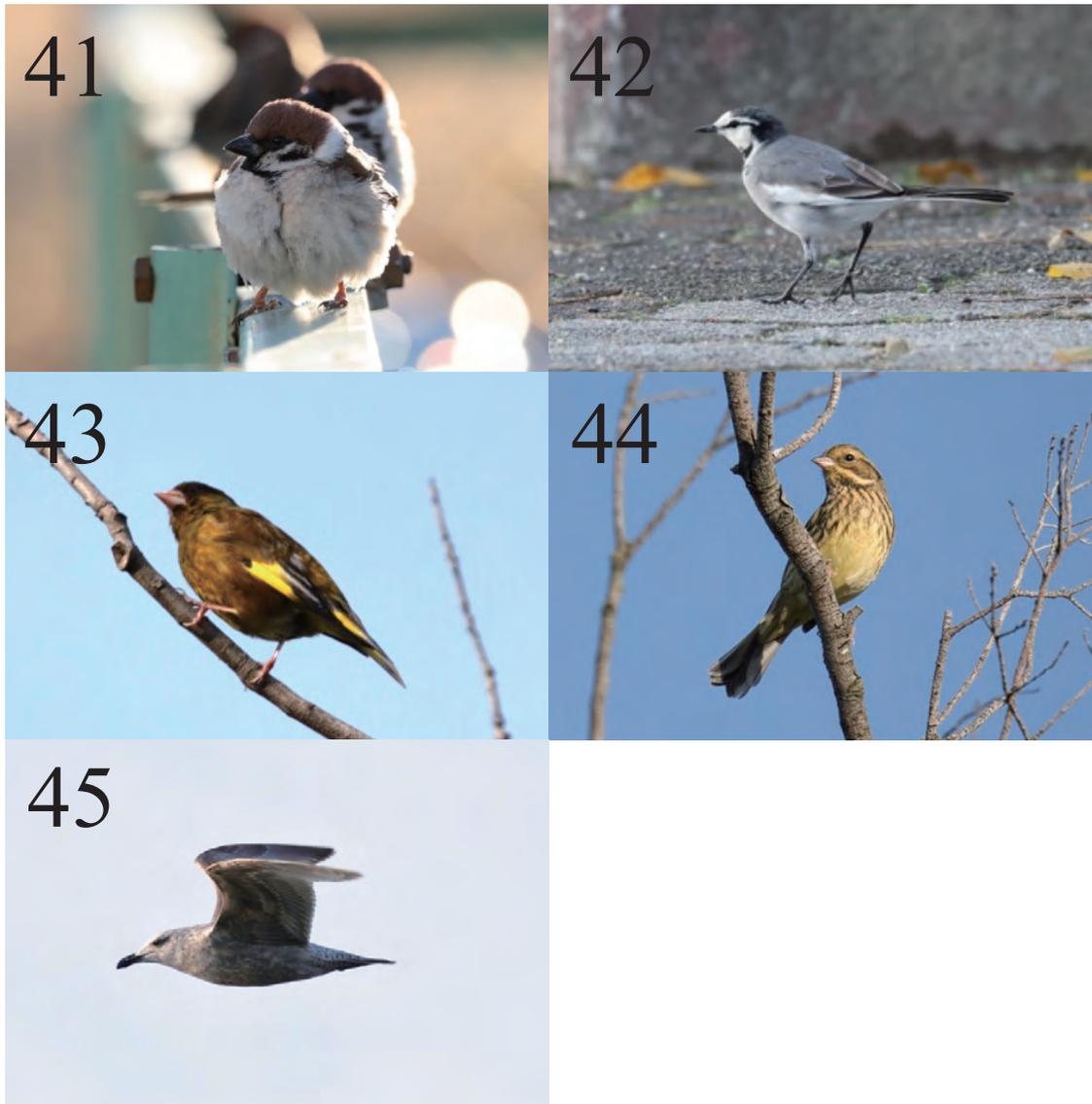


図5.（続き）

41. スズメ *Passer montanus* : 2023年2月22日撮影

43. カワラヒワ *Chloris sinica* : 2022年6月5日撮影

45. *Larus* sp. の幼鳥 : 2023年1月11日撮影

42. ハクセキレイ *Motacilla alba* : 2022年11月30日撮影

44. アオジ *Emberiza spodocephala* : 2022年10月29日撮影